

成人の二重拘束的場面図の情動理解：情動推測と推測理由の検討

菊池， 悌一郎
九州大学大学院人間環境学府

針塚， 進
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/850>

出版情報：九州大学心理学研究. 2, pp.83-90, 2001-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

成人の二重拘束的場面図の情動理解

—情動推測と推測理由の検討—

菊池悌一郎 九州大学大学院人間環境学府
針塚 進 九州大学大学院人間環境学研究院

Emotion-inference of adult subjects in understanding pictures of the double-bind situation

Teiichiro Kikuchi (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Susumu Harizuka (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study was to investigate the emotion-inference of adult subjects in understanding pictures of the double-bind situation. The subjects were divided into four groups; (G1: positive mother's behavior information, positive facial expression and negative verbal expression. G2: positive mother's behavior information, negative facial expression and positive verbal expression. G3: negative mother's behavior information, positive facial expression and negative verbal expression. G4: negative mother's behavior information, negative facial expression and positive verbal expression.). The subjects were presented a short story which have the double-bind expression of mother and information on the mother's behavior, and then they were asked to infer the mother's emotion and the cause of inferring. The results were followings. It is difficult for the two groups (G1 and G3) to infer the mother's emotion. This result is partly common to preschool children.

Keywords: emotion-inference, adult subjects, double-bind situation

問 題

近年、D・ゴールマン著の『EQ こころの知能指数』がベストセラーになるなど、情動の対人的・社会的な機能が注目を集めている。現代の社会生活において人が安定した良好な対人関係を形成したり、円滑に対人場面を処理するためには、適切に相手の情動状態を理解することが不可欠である。

それでは、私たちはどのような手掛かりを利用して、他者の情動を理解しているのだろうか？

従来から Ekman(1982)をはじめとして、多くの研究では表情を他者情動の理解の重要な情報源としてきた。しかし、実際には私たちはじつに多くの情報にさらされている(Nakamura et al. 1992)。

先行研究より、日常場面で情動理解に用いられるのは、表情だけではなく、身体動作や口調、状況、発話内容、他者の特性、社会的カテゴリ知識などがあげられる(Gnepp, et al 1982; 朝生1987; Gnepp, et al 1988; 笹屋1997)。

さらに臨床心理学においては、Bateson et al.(1956)による二重拘束理論が、これら複数ある情報の矛盾による情動理解の混乱や、さらには対人関係上の問題を示唆している¹⁾。二重拘束理論は家族療法の発展に寄与するなど、理論として臨床の現場で多用されながらも、その実証的研究は少なく、その必要性が指摘されている(青木1

993; Koopmans, 1997)。

そこで、これまでの研究(菊池・針塚1998; 菊池2000)では実験的手法をもちいて(いわば二重拘束的であるといえる)登場人物の表出情動の情報が矛盾する場面(二重拘束場面)についての、幼児の情動理解を検討することを目的としてきた。

菊池・針塚(1998)では、表情と発話内容が矛盾する場面を、幼稚園の年少、年中、年長児に呈示することにより、二重拘束の場面の情動理解を発達の的に検討した。その結果、表情が否定的で発話内容が肯定的な場面の理解において、年少児が否定的情動を、年中児と年長児が肯定的情動を多く回答していた。このことから二重拘束的な場面について情動理解を行うさいに、年少児は表情を、年中児、年長児は発話内容を手掛かりとして用いたものと考察された。

しかしながら菊池・針塚(1998)の研究では、「なぜそのように推測したのか」という推測理由を問うていないので、実際に被験者が表情あるいは発話内容のどちらかを選択的に手掛かりとしたか不明確なままであった。

そこで菊池(2000)では、推測理由を明確にするために

¹⁾ 平木(1981 新版心理学事典 p.98. 平凡社)によると二重拘束とは「コミュニケーションの病理で、表出されるメッセージとそれに対立し矛盾するメッセージが同時に伝達され、受け取った側が一貫した満足のいく方法で行動できなくなること」をいう。

情動推測の根拠となると考えられる、登場人物「母親」の特性を表現する情報(行動情報)を、二重拘束の場面に先行して被験者に呈示し、情動推測の質問とともにその推測理由も確認した。

その結果、幼児は多くの場合、表情を主な手掛かりとして情動推測を行なうと考えられるが、母親の特性が肯定的でありながら、表情が肯定的、発話内容が否定的な場面の理解に困難さが示された。

よって本来準拠すべき母親の表情を他の情報が支持する場合(ここでは特性の情報が肯定的であった)、表情と発話内容の矛盾がより強く、幼児に混乱や葛藤を生じたと考えられた。

この結果は、情動理解の混乱を示唆する二重拘束理論と関連するものと考えられたが、発達的な観点では、実験結果に年齢差を見出すことはできなかった。二重拘束の場面の情動理解における発達の変化について、対象を就学前の幼児から学齢期、さらに成人へとひろげながら検討する必要があると思われた。

また同時に呈示課題そのものについても、適切な課題であったかを、検討を行う必要があると思われた。菊池(2000)で呈示された二重拘束の場面は「子どもが猫を拾って、連れてくる」という場面であった。ここでは先行する情報として、母親の特性(「母親は猫が好き」あるいは、「母親は猫が嫌い」)が呈示された。しかし、上記のように、実際には必ずしも母親の特性を表現する情報が二重拘束の場面の情動理解において、重要な情報として、幼児に利用されなかった可能性が高い。

これには幼児の認知発達上の問題も考えられる。すなわち、幼児にとって、表情と発話内容、さらに特性を表現する情報という三つの情報を同時に考慮して情動理解を行うこと、そのものが困難であった可能性もある。

以上の問題を整理すると、(1)幼児が示した情動理解の困難は、認知発達上の限界によるものか、それとも二重拘束的な情動表出による混乱であるか、(2)菊池(2000)で呈示された課題そのものの再検討、すなわち二重拘束の場面の情動理解において先行する特性の情報が重要な手掛かりと想定し呈示することが適当であるか、ということである。

そこで認知発達が既に獲得されたと考えられる成人を対象にして、菊池(2000)と同様の課題を用いて、質問紙調査を実施した。

方 法

目的 本調査の目的は、表出情動が矛盾する二重拘束の場面について、成人対象者がどのように情動推測やその理由づけを行なうかを検討することである。

対象者 短期大学および看護学校の学生120名(男子学生3名を含む)。平均年齢19.6歳(18-28歳)。

条件により、対象者を4群に分けた(Table 1)。

計 画 4(群:P-PN群, P-NP群, N-PN群, N-NP群)×2(課題:行動情報課題, 二重拘束課題)。「群」は被検者間要因、「課題」は被検者内要因である。

材 料 質問紙に記載されたイラストと文章により、以下の2種類の課題が呈示された。

課題1「行動情報課題」

課題2「二重拘束課題」

Figure 1, Figure 2にそれぞれの課題を示す。

手続き 調査は調査者の担当する講義の一環として行なわれた。

対象者に配布された質問紙のフェイスシートには「親子のコミュニケーション場面についての調査」と記し、二重拘束についての調査であることは伏せた。同時に

Table 1
各群における特性と表出の組み合わせ

各群	特性と情動表出の組み合わせ
P-PN群	肯定的行動情報-肯定的表情/否定的発話内容
P-NP群	肯定的行動情報-否定的表情/肯定的発話内容
N-PN群	否定的行動情報-肯定的表情/否定的発話内容
N-NP群	否定的行動情報-否定的表情/肯定的発話内容

Table 2
質 問

番号	内容
質問①	「お母さんの気持ちはどんな気持ちだと思いますか?」(情動推測)
質問②	「どうして、お母さんはそんな気持ちになったと思いますか?」(推測理由)

「この調査は、ある親子のコミュニケーションの場面について人がどのようにその場面を理解するかを調べようとするものです。2種類の課題から質問紙はなっていますので、それぞれについて記入上の注意を読んでお答えください。…云々」と説明文により教示した。

またフェイスシートには対象者の年齢、性別、所属を記入させた。

質問紙の1ページ目は「行動情報課題」である。一行目に「はじめに、次の絵と文章を読んで、その後、以下の質問にお答え下さい」と記し、ページの上半分イラストと文章により材料を呈示し、下半分に「次に以下の質問にお答え下さい」と教示し、対象者に記入、回答させた。Table 2に質問内容を示す。

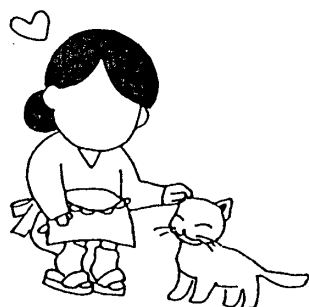
質問紙2ページ目は「二重拘束課題」である。イラスト

と文章で呈示される内容が異なるほかは、前ページと同じ構造である。ページ上半分で材料を呈示し、下半分で質問に回答記入させた。

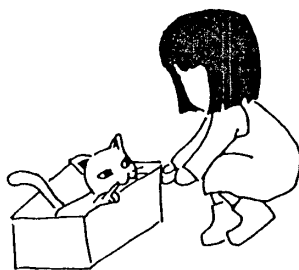
以上の質問紙は、集団で一斉に施行され、適当な記入時間の後、調査者によって回収された。

分類 対象者の各質問に対する回答は、Table 3のようにコード化し分類した。なおこの分類は菊池(2000)と同じものである。また質問①の分類カテゴリーにある「肯定的情動」とは、自己充足感、期待感、相手に対する受容を表現するものとした。また「否定的情動」とは、悲哀、挫折感、相手に対する拒否を表現するものとした。

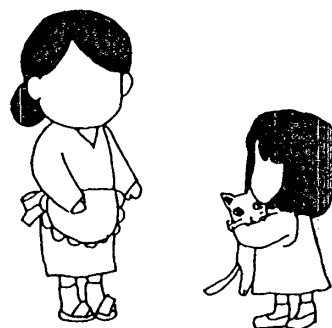
信頼性 調査者の分類の信頼性を検討するため2名の大学院生に、対象者からランダムに選んだ各12名(計24名)の回答を分類するように依頼した。その結果、調査者の



肯定的行動情報
「ゆかちゃんのお母さんは猫がいたら、いつもかわいがっています」

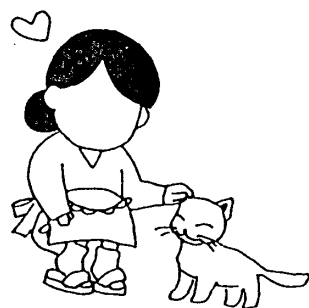


「ある日、ゆかちゃんは箱に入った猫がいるのを見つけました」

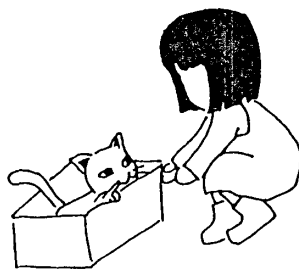


「そこでゆかちゃんはその猫をお母さんに見せようと、猫を抱いてお母さんのところへ連れていきました」

Figure 1 行動情報課題 (P-PN群)



肯定的行動情報
「ゆかちゃんのお母さんは猫がいたら、いつもかわいがっています」



「ある日、ゆかちゃんは箱に入った猫がいるのを見つけました」



肯定的表情と否定的発話内容
「そこでゆかちゃんはその猫をお母さんに見せようと、猫を抱いてお母さんのところへ連れていきました。そこでお母さんはこう言いました。『だめじゃない、猫をひろってきて』」

Figure 2 二重拘束課題 (P-PN群)

Table 3
分類のカテゴリー

質問	カテゴリー				
質問①「情動推測」	肯定的情動	否定的情動	その他		
質問②「推測理由」	表情準拠	発話内容準拠	特性準拠	状況準拠	その他

Table 4
質問①「情動推測」

群	行動情報課題			二重拘束課題		
	肯定的	否定的	その他	肯定的	否定的	その他
P-PN 群	16	4	10	7	13	10
P-NP 群	18	5	7	4	16	10
N-PN 群	2	17	11	7	10	13
N-NP 群	0	23	7	2	18	10

Table 5
質問②「推測理由」

群	表情準拠	発話内容準拠	特性準拠	状況準拠	その他
行動情報課題					
P-PN 群			12	1	17
P-NP 群			12	3	15
N-PN 群			13	5	12
N-NP 群			12	2	16
二重拘束課題					
P-PN 群	0	0	5	4	21
P-NP 群	0	0	6	3	21
N-PN 群	0	0	6	7	17
N-NP 群	0	0	8	5	17

分類との一致率が、85.4%と93.7%であった。これにより調査者の分類の信頼性が確かめられたとし、以下のデータの分析を行った。

結 果

量的分析

はじめに登場人物母親の情動についての質問(質問①「情動推測」)の回答結果を量的に分析した(Table 4)。表中の数値は、各カテゴリーに回答した人数である。これらの回答について、群ごとに χ^2 検定により統計的に処理を行なった。

その結果、行動情報課題においては、P-PN 群($\chi^2(2)=11.40, p<.05$)と P-NP 群($\chi^2(2)=9.80, p<.01$)と N-PN 群($\chi^2(2)=11.40, p<.01$)、N-NP 群($\chi^2(1)=8.53, p<.01$)にと、すべての群に有意差がみられた。

しかし二重拘束課題においては、P-NP 群($\chi^2(2)=7.20, p<.05$)と N-NP 群($\chi^2(2)=12.80, p<.01$)に有意差がみられたものの、P-PN 群($\chi^2(2)=1.80, p>.05$)、N-PN 群($\chi^2(2)=1.80, p>.05$)には有意差はみられなかった。

以上のことより、行動情報課題においては、P-PN 群、P-NP 群の対象者は有意に母親の情動を肯定的に推測し、N-PN 群、N-NP 群の対象者は有意に母親の情動を否定的に推測している。

また、二重拘束課題においては、有意差のみられた P-NP 群と N-NP 群では、対象者は有意に母親の情動を否定的に推測している。しかし有意差のみられなかった P-PN 群と N-PN 群では対象者の回答に偏りがない結果となった。

続いて、質問①において推測した母親の情動について、その推測した理由の質問(質問②「推測理由」)の回答結

Table 6
推測理由における「その他」の具体例

P-PN 群	「猫の世話をするのがたいへんだから」「どこかの家の猫かもしれないから
P-NP 群	「猫は好きだけど、飼えないから」「アレルギーだから、家族の誰かが」
N-PN 群	「ゆかちゃんがきちんとお世話できるか試したいから」「甘えん坊だから」
N-NP 群	「いつも、掃除の邪魔するから」「猫が死んだとき、かわいそうだから」

果を量的に分析した(Table 5)。ここでも表中の数値は、各カテゴリーに回答した人数である。各群ごとに χ^2 検定を行なった。

その結果、行動情報課題においては、P-PN 群($\chi^2(2)=13.40, p<.01$)とP-NP 群($\chi^2(2)=7.80, p<.05$)、N-NP 群($\chi^2(2)=10.40, p<.01$)において有意差がみられた。残るN-PN 群($\chi^2(2)=3.80, p>.05$)には有意差はみられなかった。

また二重拘束課題では、P-PN 群($\chi^2(2)=18.20, p<.01$)、P-NP 群($\chi^2(2)=18.60, p<.01$)、N-PN 群($\chi^2(2)=7.40, p<.05$)、N-NP 群($\chi^2(2)=7.80, p<.05$)の4群すべてに有意差がみられた。

しかしながら、行動情報課題および二重拘束課題の数値をみると、「その他」のカテゴリーに回答が偏っている。すなわち、推測理由については、ほとんどの群で、表情や発話内容、特性、状況といったものを準拠した回答ではなく、その他の理由づけが多く行なわれた結果となっている。

推測理由の内容分析

質問②「推測理由」の回答が、「その他」に分類される回答が多くなっていることより、これら「その他」に分類された回答の内容をより詳細に検討する必要があると思われる。そこで、Table 6にこれらの回答の具体例を示す。

Table 6に示した回答内容を見ると、表情と発話内容が矛盾する二重拘束的場面について整合性のある理由付けをするために、対象者は表出情動が矛盾するのが当然であるような出来事や事情を新たに考案するようである。

そこで続いて、これら対象者の推測理由についての回答をKJ法²⁾を参考に分類し、どのような回答内容があるかを検討した。

P-PN 群 Figure 3はP-PN 群30名の推測理由についての

回答を分類したものである。分類を検討すると、推測理由は6～7のグループに分かれそうである。

まず、①「猫が好き」という母親の特性を準拠している回答である。これは従来の分類基準にも含まれていた。続いて②「好きだけど…」という母親の猫が好きという特性を考慮しながらも、その後の表出情動が矛盾していることから、母親の葛藤を推測理由としている回答である。次は③「世話がたいへん」という、いわば動物を飼うさいに問題となる事情を考案し推測理由としている回答である。また④「家ではダメ」という家の事情を考案し、推測理由としているものである。⑤「よその猫」は、猫そのものに問題があるという理由づけである。

残るグループは⑥「ゆかちゃんの気持ち」である。この回答は自分(母親)の好きな猫をせっかく娘(ゆかちゃん)が拾ってきてくれたという事実をふまえ、子どもの気持ちをおもんばかって、表出情動が矛盾してしまった、ということ推測理由としてあげているものである。

以上のように、残るP-NP 群、N-PN 群、N-NP 群についても同様の分析を行った。

P-NP 群 この群についてもKJ法により30名分の内容分析を行った。その結果、P-PN 群でもみられた①「猫が好き」、②「好きだけど…」④「家ではダメ」⑥「ゆかちゃんの気持ち」のグループがみられた。これら以外に⑦「嫌だわ」という母親の否定的な情動を推測理由にしているもの、⑧「捨て猫だから」という子どもが連れてきた猫が捨て猫であることを推測理由にしているもの、さらに⑨「命を大切に」という命あるものを飼うことのないことを推測理由にしているものがみられた。

N-PN 群 この群では、他の群でもみられた⑥「ゆかちゃんの気持ち」のグループの他に、⑩「猫が嫌い」という母親の特性を準拠し、推測理由としているもの、⑪「別の事情」という猫を飼えないあるいは飼わない理由を何か別の事情があるためとする推測理由である。

N-NP 群 この群でも⑩「猫が嫌い」、⑥「ゆかちゃんの気持ち」⑪「別の事情」といったグループとともに、⑫

²⁾ KJ法については、川喜田二郎著「発想法 想像性開発のために」(中公新書 1967)を参照。

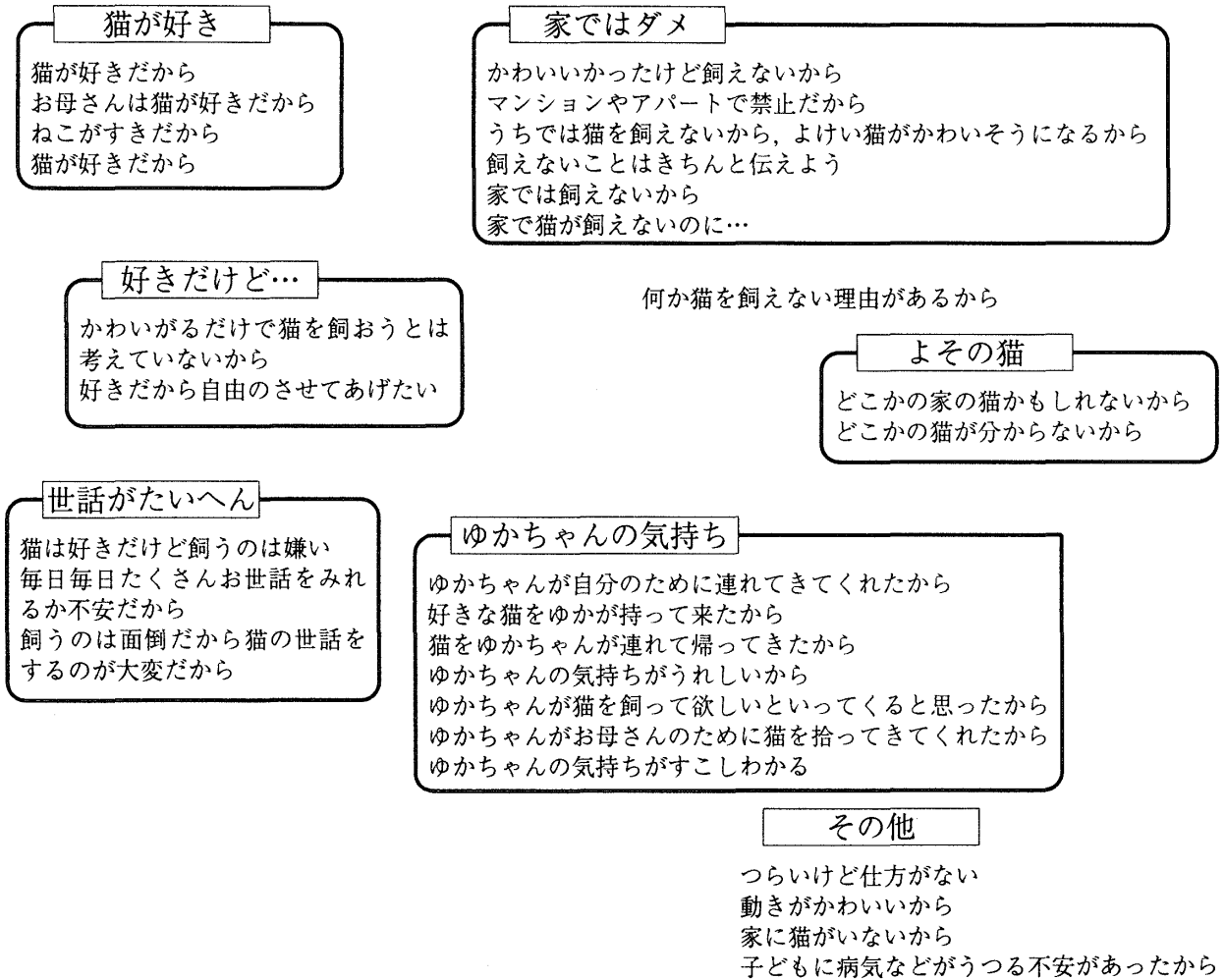


Figure 3 K J法による推測理由の分類図 (P-PN 群)

「嫌いなのに」と母親の葛藤を推測理由としているものがあった。

以上の分析で、導き出された各グループを Table 7 に示す。群ごとに各グループを構成した回答数も示す。

なお以上の分析は KJ 法を参考に、各群について独立にグループ分類を行なった。その結果例えば、P-PN 群でみられた③「家ではダメ」や⑤「よその猫」は、N-PN 群や N-NP 群でみられた⑭「別の事情」とほぼ同じ内容のものであると考えられる。しかしそれぞれの群を、それぞれに分析した結果として、導き出されたグループなので、ここではそのまま扱うことにした。そのため統計的処理には不相当と思われるので、ここでは数値のみ示し結果とする。

考 察

まず本研究の目的として、菊池(2000)で示された二重

拘束的場面についての幼児の情動理解の困難さが、認知発達上の限界に由来するものなのか、それとも表情と発話内容が矛盾する二重拘束的表出の呈示によるものなのかということ、成人を対象にして検討することであった。もし先の幼児の情動理解についての困難さが認知発達と関連するものであるならば、認知発達が既に獲得されていると考えられる成人に同様の課題を呈示した場合、幼児とは異なる回答の仕方を示すものと考えられた。

しかしながら、結果をみると二重拘束課題において、表情が否定的な群(P-NP 群, N-NP 群)では、母親の情動を否定的情動と推測する回答が多くなっているものの、表情が肯定的な群(P-PN 群, N-PN 群)では回答に偏りのない結果となっている。このことは幼児が示した情動理解の困難さと一部共通するものである。成人も幼児も共通して、P-PN 群(肯定的特性、肯定的表情と否定的発話内容)における二重拘束的場面の情動推測の回答に有意

Table 7
KJ法による推測理由の分類と回答数

分類	P-PN 群	P-NP 群	N-PN 群	N-NP 群
①「猫が好き」	4	4		
②「好きだけど…」	2	9		
③「世話がたいへん」	3			
④「家ではダメ」	6	3		
⑤「よその猫」	2			
⑥「ゆかちゃんの気持ち」	7	2	10	13
⑦「嫌だわ」		4		
⑧「捨て猫だから」		2		
⑨「命を大切に」		2		
⑩「猫が嫌い」			7	8
⑪「別の事情」			3	4
⑫「嫌いなのに」				3
その他	5	4	8	2

差を与えていないのである。すなわち、成人、幼児ともに母親の表情が肯定的な場合、母親の情動を肯定、否定のいずれかの情動に特定できていないということである。

菊池(2000)では実験法が用いられ、本研究においては質問紙法という課題の呈示方法が異なるため、単純に比較はできないが、本研究の結果より幼児が示した情動理解の困難さは、単に認知発達上の限界によるものだけでなく、二重拘束的表出が影響した可能性が考えられる。

また、本調査の結果として特筆すべきことは先にも述べたように、表情が否定的な群(P-NP群、N-NP群)では、「母親」の情動は否定的に多く回答されるものの、表情が肯定的な群(P-PN群、N-PN群)では、「母親」の情動を特定できていないということである。

このことより、表情が否定的である場合、表情と発話内容の表出の矛盾は否定的情動と推測されるが、表情が肯定的である場合、表情と発話内容の表出の矛盾は特定の情動とは同定されないということである。表情と発話内容が矛盾することそのものが否定的情動の表出と捉えられ、本来情動理解において、主な手掛かりとなる表情の優位性が損なわれるものと考えられる。

次に内容分析を行った推測理由について考察する。まず量的分析では、ほとんどの群で表情や発話内容、特性、あるいは状況といったものを準拠した回答ではなく、その他の理由づけが行なわれていた。そこで内容分析としてKJ法による分類を行った。Table 7にその結果を示したが、これを検討すると各群共通してみられる分類グループとして⑥「ゆかちゃんの気持ち」があげられる。このグループは登場人物「母親」の娘とおぼしき「ゆかちゃん」の気持ちをおもんばかりの結果、「母親」の表出が矛

盾しているという理由づけである。これは母親のいわゆる「善意」が表出情動に影響した、という肯定的、好意的な理由づけであると思われる。

しかしながらこの分類グループは、P-PN群、N-PN群、N-NP群では多くの回答がこの分類に含まれているものの、例外的にP-NP群においてのみ⑥「ゆかちゃんの気持ち」を推測理由とした回答が少なくなっている(Table 7を参照)。このことから、「母親」の特性が肯定的であり、表情が否定的、発話内容が肯定的な場面(P-NP群)については、母親の「善意」が表出情動を矛盾させたという理由づけは成立しづらく、むしろそれ以外の理由づけを対象者が行なわざるをえなかったと考えられる。

以上のことよりたとえ情動推測を、表情を主な手掛かりにして行なったとしても、推測理由として表情、場合によっては特性、を準拠するだけでなく、それに加えて表出情動の矛盾を合理化するために、様々な理由づけを新たに考案するようである。すなわち二重拘束的場面の情動理解においては、特性についての情報だけではなく、それ以外の様々な情報、例えば家の事情、母親の娘にたいする態度など、がその理解に関連すると考えられる。

以上、本調査で成人の二重拘束的場面の分析を行うことによって、幼児に課題として呈示する場面そのものをより適切なものへ変更していく必要があることが示唆された。

文 献

青木みのり 1993 二重拘束的コミュニケーションが情報処理および情動にあたる影響 教育心理学研究,

- 41, 31-39
- 麻生あけみ 1987 幼児期における他者感情の推測能力の発達-利用情報の変化- 教育心理学研究, 35, 33-40
- Bateson, G., Jackson, D.D., Haley, J. & Weakland, J. 1956 Toward a theory of schizophrenia. *Behavioral Science*, 1, 251-264
- Ekman, P. 1982 *Emotion in the human face*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gnepp, J., Klayman, J., & Trabasso, T. 1982 A hierarchy of informational sources for inferring emotional reactions. *Journal of Experimental Child Psychology*, 33, 111-123.
- Gnepp, J., & Chilamkurti., 1988 Children's use of personality attributions to predict other people's emotional and behavioral reactions. *Child Development*, 59, 743-754.
- 菊池悌一郎・針塚進 1998 二重拘束的コミュニケーション場面の情動理解の発達 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 43 (2), 227-235
- 菊池悌一郎 2000 幼児における情動矛盾場面の理解—行動情報の呈示による検討— 九州大学大学院人間環境学研究科修士課程平成11年度修士論文(未刊行)
- Koopmans, M 1997 Schizophrenia and the Family: Double Bind Theory Revisited (Parts of this paper were presented at the Annual Conventions of the International Congress of Psychology, Montreal, Canada, August, 1996, National Council on Family Relations, Portland, OR, November, 1995; and the American Psychological Association, New York, NY, August, 1995.)
<http://goertzel.org/dynapsyc/1997/Koopmans.html>
- Nakamura, M., Buck, R., Kenny, D.A. 1990 Relative contributions of expressive behavior and contextual information to the judgement of the emotional state of another. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1032-103